

石川さん追悼

写真は「ようこそ大学へ！施設の子どもたちへの学習支援」という名古屋市立大学人文社会学部の企画で、児童が作成した石川洋明さんの似顔絵である。表情豊かな石川さんをよく描いている。



石川さんは私の同僚だった。2014年6月30日に亡くなった。私の退職後3ヶ月後のことだった。石川さん「追悼文集」ができあがり、1冊送られてきた。文集について書きたいことも多いが、石川さんの死から4年3ヶ月のいま、あらためて石川さんの死を悼む。文集に寄稿した2015年6月30日送付の原稿を紹介したい。

石川さんについて、2014年8月からレポートを10本書いてきた。最初は8月3日の「石川さんの思い出(1)」である。卒業生から送ってもらった「卒業記念パーティ」の写真を載せてある。私の隣で、石川さんが花束を高々と持ちあげているのが印象的だ。この日は卒業式からパーティへと、石川さんは車椅子で動き回っていた。

石川さんの「死」から間もなくして、彼のことを書きたくなった。ここ数年のことを、記憶にとどめておきたいと思うようになった。それで7月30日から、じつに4年ぶりに「レポート集」を再開した。毎朝、写真付きレポートを書き、「レポート集」(<http://rigakuken.main.jp/akirayamada/report/>)としてアップしてもらっている。とにかく書き続け、レポートの数は330本以上にのぼる。早朝にレポートを書くことで、退職後の単調な生活に「リズム」をつけることができた。石川さんに感謝したい。

10本のレポートを読み返しながら、「石川さん追悼」を書いていきたい。彼とは、私の退職2年ほど前から親しく接するようになる。短大時代から知っていて、人文社会学部で同じ学科に所属するようになり、10数年にわたる「同僚」であった。私が学部長・研究科長を務めていた頃には、「ハラスメント問題」などでよく相談した。信頼できる同僚ではあったが、個人的にはどうもしっくりいかないことが多かった。今から考えると思いすごしもあったが、彼のプライドの高さ、「もの言い」に反発を感じることも多かった。

2012年9月の悲しく、思い出しても辛い「事件」から、彼との接し方が変わった。というより、接し方を変えずにはおられなかった。息子さんの葬儀のあと、思い切って彼の研究室に行った。とにかく彼が心配で、ひと言でも声をかけたかったからだ。彼は涙して心境を語ってくれた。当時、いちばん腹が立ったのは新聞報道であった。「事件」に関する新聞記事コピーを持参した。彼に渡すか迷ったが、勘のいい彼が催促したので渡した。新聞を読んでいなかったようだが、こんな風に「事件」が報じられているのか

と語っていた。彼の研究室を積極的に訪ねたのは、これからである。どうも心配でならず、とにかく彼の顔を見たかった。ある新聞報道について、私が抗議するというと、彼から珍しく「感謝の言葉」をもらったのが忘れられない。

私は退職が迫っていたが、なにかできないかと考え、講義などの「代役」を引き受けたりした。とくに思い出に残るのが、社会調査実習とゼミである。2013年6月になっても、2012年度調査の報告書が石川班だけ完成していなかった。彼も気にしていたが、入院中であり、どうにもならない状況であった。とにかく学生を集めて、期限を決めて原稿を集めた。当時、私は目の手術を控えて調子が悪く、スムーズに編集・校正作業が進まず、イライラしていた。なんとか報告書を完成させてから、市大病院に入院した。退院直後に、調査に協力してもらったある議員さんに、報告書を持って「事情説明」に行ったことも忘れられない。『名古屋市会調査2012』という報告書であり、彼もあとがきを書いている。「地方自治は民主主義の学校である」などと鋭い指摘をしている。

ゼミのことも書いておきたい。8月末にゼミ生を集めて意向を聞き、後期の4年ゼミは私が担当することになった。病院に伝えに行くと、彼は猛然と怒りをぶつけてきた。誰もいなかった食堂に場所を移して、しばしの「言い争い」を演じた。彼の気持ちは痛いほど分かっていたが、つい「喧嘩ごし」になってしまった。彼も納得して、私が5人のゼミ生を受け持った。驚異的な努力により復帰してから、彼が再びゼミを担当して、こっそりと指導したようだ。「言い争い」をしたり、一抹の寂しさを感じたりしたが、彼が最後まで卒論指導ができて良かったと思う。

2014年2月22日2時から201教室において、私の最終講義が行われた。彼も参加してくれ、いつものように熱心にメモを取り、コメントを書いてくれた。そのコメントは大切に持っている。「褒めすぎ」であり、すこし恥ずかしいが記念に残るメッセージなので紹介しておきたい。

辛口コメンテーターに辛口のコメント*をなどと考えておりましたが、先生のご業績をうかがっているうちに、そういう気持ちは後景に退いてしまいました。

先生は真に「行動する研究者」であったのだ、ということがわかり、深い感銘を受けております。調査研究、教育、メディアでの発言、どれをとってもすばらしい。個人的なことを言えば、先生の行動力ゆえに、調査実習石川班(2012)も石川ゼミも救っていたのだということがよくわかります。

本当にありがとうございます。お世話になりました。

*批判(診断書)はその通りだとは思いつつ、ではどうするか(処方箋)、特に予算等についてのくわしい話をもっとほしい…など

卒業式を終え、いよいよ私の退職の日を迎えた。辞令をもらってから、教職員の皆さんにお礼のメールを出した。すると彼からすぐに返信が届いた。私が退職後はゆっくり仕事をしていきたいと書いたのに対し、「私も、やり残した仕事を進めていこうという立場ですが、スローペースが許されるかどうかは神のみぞ知る、です。」そして「くれぐれもお体にはお気をつけておすごしてください(病気は私だけで十分です)」とあった。彼のお通夜と葬儀の席で、このメールのコピーを何度も読み返した。

こうしてレポートを読みながら、「追悼文」を書いていると、思い出に残ること、思い出すことが次々と浮かんでくる。あと2点だけ書いておきたい。

一つは中日新聞の連載記事である。大きな反響があり、賛否両輪の「評価」もあったようだ。記事を書いた安藤明夫編集委員と、石川さんのことを何回か話したことがある。「問題認識特講」の非常勤講師を依頼しに中日新聞社に行ってからだ。安藤さんはNPOの関係で、石川さんを前から知っていたという。安藤さんは203教室で金曜の1限に講義をした。2限には石川さんが同じ教室で「最後の」講義をした。これもなにかの縁であろうか。あの記事については厳しい声も聞いており、「責任」を感じたりもした。でも「石川先生が言いたかったこと、書きたかったことが書かれている」という声を聞いたこともある。

もう一つは、石川さんの遺稿「私の障害学」である。これもレポートに書いたが、彼らしい辛口で「障害をもった経験」を社会学者の目線で綴っている。これを読んで、私の最終講義に彼が車椅子で来てくれて、さっと201教室の中ほどまで上がり、講義を聴いていた姿を思い起す。あの時、教室の最前列に人工呼吸器をつけ、普通学級に通う小学2年の林京香ちゃん一家も来てくれていた。退職後も京香ちゃんから、「元気」をもらっている。「遺稿」に書かれていた障害者支援に向けた、社会学者らしい「意向」が参考になる。ここでも彼に感謝したい。

(2018年9月30日)